

「仕事」と「稼ぎ」



11月2日から4日までの3日間、森のようちえん 全国交流フォーラム in 千葉に参加してきました。

基調講演は、哲学者の内山節氏による「子どもたちの時間」。その中で内山さんは、「仕事」と「稼ぎ」の違いを分かりやすくお話してくれました。

◇どんな小さな子でも仕事をもって生きる

内山さんがピレネーを旅行中であつた少年は自分よりも小さい弟の手を決して離さずに釣りをしていたそうです。ちよつと白夜の季節。1時ぐらいいらないと夜になりません。子どもだけで出かけていいのかが気になり、帰らなくていいのかが尋ねますが、「自分の仕事を終えてきたからあとは自分の時間。だからいいんだ」といいます。

仕事と言っても、鶏の世話であつたりと、その子の年齢のあつた仕事を家庭内で受け持っています。でも、そのことに誇りをもって生きている。有益な子どもとして生きているのです。

一番大切な仕事は、下の兄弟の面倒を見ること。たとえ、友達とサッカーをする時でも、下の子の手は離しません。

◇将来のためっていつからが将来なの？

一方、今の日本の子どもには家庭での仕事はありません。「家のことはいいから、将来のために勉強しなさい」

と、子ども達は塾や習い事に追い立てられています。それが生きることを貧しくしてはいないでしょうか。未来は今の延長線上にあります。仕事をしていない子どもたちの将来に仕事成り立つのでしょうか。

◇出稼ぎじゃないけど、「稼ぎ」って

田舎に行く「おらうちの息子は東京に稼ぎに行っている」というのを聞きます。出稼ぎに行っているわけではなさそうなのに、仕事ではなく、稼ぎという言葉を使うのはなぜなのでしょう。

それは、仕事とは地域共同体のために働くことであつて、お金を得るためだけではないからです。稼ぐという事は、単にお金を得るための働き。畑仕事があり、畑稼ぎがある。仕事とは、地域と共にあるものなのです。

将来のためにがんばることは生涯にわたつて「稼ぎ」にしかありません。「稼ぎ」は社会情勢において不安定です。その人でなくても、かわりはいくらでもいます。しかし、「仕事」をすることは、収入は少ないけれど、なくなることはありません。

◇人間的な生き方

1975年ごろから、フランスでは、都会から田舎に移住してくる人が増えているそうです。それは、都会の「稼ぎ」の世界がいやになった人達が増えたから。

自然と共に生きたいと思う人が増え、大きな町の限界を感じている人が増えているのです。

都会では、人が倒れていても、面倒がられるだけ。でも、田舎は違います。その人はかけがえのない一人であり、物ではないからです。

◇村の自治はNPOで

フランスには人口100人くらいの村がたくさんあるそうで、役場には役人は一人という場合が多いそうです。そんな村は住民がNPO組織を作つて業務のほとんどをしているとのこと。村の管理NPO、道路管理NPO、学校管理NPO…。90代くらいの人が一番忙しく、NPOを3〜4つかけもちし、自分たちの地域は自分たちでつくるとして、いろんな役割を担っているそうです。地域において価値ある人間として生きているのです。

◇ピレネー犬でさえも仕事に誇りを持っている

内山さんがピレネーに滞在していた時、牧羊犬のピレネー犬が滞在中のホテルによく遊びにきていたそうです。

仕事以外の時は、とっても食いしん坊な犬だそうですが、いざ仕事になるときちんと仕事をし、羊たちが草を食んでいる時は暇なので、街まで駆け下りてきて、内山さんのところにくる。そして、また時間になると仕事に戻っていくのだそうです。

ピレネー犬でさえも自分の仕事を持ち、誇りを持って生きているように見えたそうです。

わたしはこのお話を聞いて、「仕事」の大切さをつくづくと感じました。わたしたちの団体は資金は豊かではありませんが、決して貧しくはありません。

皆さんひとりひとりとのつながりが、わたしたちの運営を助け、豊かな環境を作っているのだとわかり、そのことに心から感謝しました。

辺見妙子